
『幻想郷訪問録』 訪問録。

橙の上海人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『幻想郷訪問録』訪問録。

【Nコード】

N10290

【作者名】

橙の上海人形

【あらすじ】

同サイトにて大絶賛執筆中の『幻想郷訪問録』の世界へと、イレギュラーな誰かが遊びに来たようです。

さて。幻想郷は、4人の妻達は、そして黒羽刀弥はどうなるのか？ 今回の訪問者との接触で、刀弥少年の心が少しでも満たされますよう……

※『幻想郷訪問録』作者の案山子様（元・黒羽様）には許可をいただきました。ですが案山子様から気に入らないとの声があれば作品

は予告無く削除・改変する可能性があります、ご了承ください。

遠足の準備。又は行ってきますの一言。（前書き）

※今回のお話はこれから始まる本編にはほとんど関係なく、投稿テストを兼ねています。

三次創作許可を出していただいた黒羽さん改め案山子さんに感謝。
拙い文章力ですが、精一杯やらせていただきます。

遠足の準備。又は行ってきますの一言。

——なあ相棒、聞いてもいいか？

なんだい？

——お前は本当に良かったのか？俺なんかを受け入れて、後悔してないのか？

なにをいうんだよ、今の僕は君の存在なしじゃありえなかったんだよ。

——でも俺は、お前を犯すものだ。蝕むものだ。

それでも君が好きだよ。愛してるよ。必要としているよ。

——俺でなくても良かっただろうに……お前には重たい荷物を背負わせちゃったな。

君らしくないね？君はいつも自分本位な奴だ。どうしようもないくらい図々しい奴だ。

——それは『他』の奴らが相手だからさ。俺たちは二つで一つ、俺にとってお前は俺自身だからな

その通り、君は僕自身でもある。自分が嫌いな奴なんかいないさ。そうだろう？

——そう、か。それもそうだな。

さあ、次の世界へ行こうよ。次のお友達は…なかなか面白い子みたいだよ？

——ああ、創造されし絶対存在の一つ。幻想の守り人。

悲しみを背負い、災厄の運命と共に歩み、愛を知ることを許されなかった少年。

「黒羽刀弥君、今から君を迎えに行く。僕と…そして俺や私達とも、友達になってくれよ？」

遠足の準備。又は行ってきますの一言。（後書き）

『幻想郷訪問録』、この物語の閲覧は終了した。

それでは早速、この物語の世界に行ってみるとしよう。

彼らはそうして旅立ちました、ネジレタセカイへと。

そうですね、最初はきつと殺されるんじゃないでしょうか？黒羽刀
弥君に。

第一部 第二話 接近（前書き）

自分のような未熟者に『黒羽刀弥らしき』が出せるか不安ではありますが、とりあえず形にしてみました。

本編との矛盾点と思われるところは、恐らく最後まで読んでいただければ解決するかと。

第一部 第一話 接近

P M 0..50 — ○○市××高等学校 2年△組教室

午前の授業が全て終了し、昼休みが始まった。

教室は購買に行く生徒や他のクラスに遊びに行く生徒でまだ少しあわただしさがあるが、俺にそういった予定は無い。

そう、俺はいつもどおり鞆から愛妻弁当を取り出して、いつも通り机の上に広げる。

前方の席にはいつも通り幻想世界を治める賢者が、

左右の席にはいつも通り吸血鬼の姉妹が、

後方の席にはいつも通り姉妹の従者がいる。

全く持っていていつも通り、至って日常的な光景かつ日常的な流れだ。

この後も全くいつも通り、男共の妬みの視線による集中砲火を無視しつつ（ん、東風谷？何故女のお前が…まさかそういう趣味か？）両手を合わせて作り手や食材への感謝の言葉を唱える。

「いただきます「刀弥ー、いるかー？」……す」

どこのどいつだ、俺の神聖な昼飯の時間を邪魔するのは……まあお前だよな、隆二。

せっかく愛する妻が弁当箱内の時間を止めてまで（そこまでする必要はないと言ったんだが…）出来立ての状態の美味しさを保ち、朝玄関で手渡してくれたこの愛の詰まった箱へ伸ばそうとする箸を……まさか、置けと？

「何の用だ、つまらない用事や気に入らない用事だった場合は即刻

お前を始末するが」

「それは流石に酷くないか？」

俺の時間は今や俺一人のモノじゃない。妻達にとっても大事な時間だ、無駄に使う訳にはいかない。

「口に出てるわよ、ダーリン」

「紫、その呼び方は寒いから本気でやめて欲しい。特に学校ではな」

我ながら恥ずかしい事を言ってしまった：しかし、俺は本当に口に出していたか？もしかして紫の能力なんかで強制的に言わされていたか？

「突っ込み入れた一人以外は三人ともお顔が真っ赤で口もパクパクと。相変わらず妬ましいな、お前」

「だが一人もくれてやる気は無いからな？どうせ次に口を開けばお前は『俺にも一人寄越せ！』とか言うんだろ」

「俺にm：何故わかった！」

答えは、お前が単純だからだよ。

「刀弥！私の時間もあなたのものよ！」

「刀弥！私の運命、改めてあなたに預けるわ！」

「刀弥！私はあなたの障害を全て取り払ってあげる！」

「あなたの心のスキマ、私が満たしてア・ゲ・ル！」

お前らテンション上がりすぎだろ。あと紫、お前まで何暴走したフリして便乗してるんだ。

学校でこいつらの欲望を満たしてやるのは難しいからな、4人とも今日は帰ったら沢山相手をしてやるでしょう：俺が倒れない程度に。

「ところで隆二、俺の箸はまだ置かれたままだ。お前の用件を早く聞こうか」

「ああ、相変わらずお前はモテモテって話だよ。お前に好意を寄せている3年の先輩が呼びだぜ？」

隆二がそれを言った瞬間、俺の右隣から巻き起こった暴風は一直線に隆二に突っ込んで、そのまま締め上げ始めた。

レミリア、そいつは友達じゃなくても悪友ではあるからもう少し……いや、大事にする必要は無いか。

「しかし、これはまた……ひどいな」

「お嬢様、お気持ちは分かりますがやり過ぎですよ……」

「お姉さまずるーい！」

「あらあら、あとでお仕置きがいるわね」

レミリアは吸血鬼の超強力な身体能力に任せて、自分の居た席から隆二の立っている教室のドアのところまで一直線に飛んでいった。……その二次災害として、彼女と隆二の位置を結ぶ直線状に居た生徒とそこにあった机や椅子が左右に派手にぶっ飛ばされている。

「紫、教室の物と皆の治療は俺がやるから、目撃者の記憶を頼む。ついでに騒ぎを聞きつけて来る奴が居ないように情報操作も頼めるか？」

「私は便利屋じゃないのよ……まあ、一番適任なのは分かるけどね。コストは深く唇を重ねあう、どうかしら？」

「じゃあ、今夜の相手はお前だな。それで吞んでくれ」

左隣でフランが「今日は私だったのに！」と騒いでいるが気にしない。その分の埋め合わせぐらいはしっかりするからな。

中には全治数ヶ月じゃ済まなさそうな者もいる被害者達のダメージに対し、『怪我をするようなことは何も起きていない』という結果を上書きする。

治療などにはよくこのような能力の使い方をするが、俺の能力で生物に関する過程や結果を操作できるのはあくまで俺の能力を介して与えた状態に対してのみという制限がついている。

（例…永夜異変では鈴仙を一度達磨状態にしたにもかかわらず、一瞬で治療できた。この時鈴仙にダメージを与えたのが同行していた妹紅だった場合、通常の方法で治療はできなかった。）

今回のケースはレミリアによる被害を俺がただ結果を弄ったように見えなくも無いが、正確には『レミリアの軌道上に障害物は無かった』という結果を能力で作り出すことによって怪我を『なかったことにした』のだ。

詳しい説明が聞きたい？俺自身にもまだ未知な部分が多いこの能力だが、暇だったら分かる範囲で答えてやらないこともないな。

「さて、次は吹っ飛んだ机なんかを……お前が片付けてくれたのか、
咲夜」

「あなたの未来の妻ですもの、お掃除はお手の物よ。あ、私は明日の晩でいいわ。見返りは求めない、と言えたらカッコイイのだけだ
ど」

すまないフラン、お前の欲求は何か別の形で満たしてやるから我慢してくれ。とりあえず、この週末はケーキでも焼いてやるとしよう。そうこうしてれば…レミリアが戻ってきたか。

「刀弥、色々散らかしてしまって…ごめ」紫、皆の記憶は操作し終わったか？」

少しばかりおイタがすぎたレミリアに、意地悪でもしてみることに

した。案の定、少し驚いた表情になっている。
謝罪の言葉を遮ったんだからな、当然か。

「ええ、この程度私には造作も無いわ。夫の役に立つのが『正しい妻の姿』、ですもの」

レミリアに視線を送りながら、サディスティックな笑みで紫が答えた。

最高のフォロー…いや、追い討ちというべきか。いい性格をしてるよ、お前は。

「どっかの誰かさんなんて、用件を聞くだけでいいところをわざわざ締め上げて聞こうとしたりするしな。故意ではないといっても、無関係の人間も巻き込むし…」

不安に満ちた、継るようないい表情だ…いや、俺はSではないはずなんだが。

「刀弥様、その辺にしていただけませんか？お嬢様も、もう反省なさってるようですし」

「刀弥ー、あんまりお姉さまを虐めないであげて？」

咲夜にフラン、助け舟を出したか。紫が物足りなさそうにしているが、二人に免じてこの辺でやめてやるか。

「ダメな子でも可愛い、って言うからな。俺はそんなお前も愛してるぞ、レミリア」

正面から優しくも強く、小柄な体を抱きしめた。レミリアのご機嫌取りは毎回こんな感じがするが、そろそろ何か新しいのを考え

たほうがいいだろうか？

でもこういうのが一番効果があると感じるし、問題は無いはずだ。

「さっきはごめんなさい刀弥…でも、あなたが誰より愛しかったから、これ以上あなたが他の誰かを見るようになってしまうのが怖かったから…」

「わかってる。わかってるから泣くな、レミリア」

このやりとりは、紫と咲夜が気を利かせていたため他のクラスメイトには認識できていなかった。

こうしてみると、やはりフランだけ外で能力を封じてしまうのは少しかわいそうだな。今すぐどうできる問題ではないが……

なんとかレミリアをなだめると、隆二の持ってきた話とやらを彼女から聞いてみた。

なんでも、例の先輩という奴は男であるらしい。さっきの言い回しは…嫉妬に駆られた隆二の妄言が含まれていたわけか、嫉妬心とは恐ろしいものだ。

「それで、そいつが体育館裏に来いと？」

「そうみたいね」

つまりあれか、また理不尽な暴力に巻き込まれるところだったのか？…面倒だ。放っておけば諦めるなり、俺に直接会いに来るなりするだろ。（後者は少し危険な展開になる可能性があるが…）

そして何より、あと15分で昼休み終了のチャイムが鳴ってしまう。その時間は、俺の神聖なる食事の時間に当てる。

異論？ そんなものは絶対に認めない。

「…さて、いただきます」

「あなた、あれはどうするの？」

紫の指差すところを見ると、目を背けたい光景があった。

顔面にレミリアの履いていた靴の跡がくつきりとついた変態が、幸せそうな表情で気絶していた。

いつも思うが、お前彼女はどうしたんだ。むしろどうやって作ったんだ。

「それより紫、この煮物はお前が作った物だろ？ 咲夜やレミリアに出せる味じゃない」

「あら、そう思う？ もしかして、私の愛の味がしたのかしら」

「それは、どうだろうな」

今日の弁当は妻4人による共同制作の物らしい。なんでそんな事になったか経緯は知らないが、たまにはこういうものもいい。

誰かの温もりを感じる料理って、素敵だよな。

さて、次の授業は何だったかな……ん？ そういえば隆二は俺を不良グループに引き渡そうとしていたのか？

あいつの性格を考えると、それはどうにも不自然じゃないか？ 殴り飛ばしても良さそうな相手ならあいつ自身が……

「……まあ例外ってこともあるのかもな、あいつも結構気分で動くのかもしれない」

side out

同日 PM 1..25 ー 体育館裏

side ????

「こちら呼び出し人、黒羽はまだ発見できない！」
『気をつけろ、奴は悪魔だ』

……来ない。というか、もう30分以上待ってる。くだらない独り言で時間を潰すのにも限度があるっての。

あー、もう教室戻らないと次の授業間に合わねえよ。

「しょうがないか、この世界での今の俺は『黒羽刀弥の通う学校の3年生』って役割みたいだしな……」

つっても、元がFラン高生徒の俺には進学校の授業内容なんてな……相変わらずさっぱりだぜ。

それでは、『幻想郷訪問録』訪問録。 始まります。

第一部 第一話 接近（後書き）

『幻想郷訪問録』訪問録。第一話、いかがでしたでしょうか？
はじめまして、作者の橙^{だいだい}の上海人形です。ちえんじやないです。
この度は当作品をお読み頂きありがとうございます。

今作は「極力本編の雰囲気を守って書く」というコンセプトがあり、
紫様達も訪問録準拠の性格で通していきます。（例外としてお気に入り
の隆二様は美化されるかも…？

作風…は頑張ってみました、どうにもそれっぽくならないですね。
難しい。

ではとりあえず一話での矛盾点になりそうなところの解説を。

・あれ、早苗さん？

このお話は訪問録初期の刀弥さん、中期の刀弥さん、後期（少なくともヘルシング編以降）の刀弥さんと私のオリキャラが接触する話です。

三部構成という事になりますね、一応。

というわけで、今回の第一部一話は初期の刀弥さんとの接触になりますね。つまり、この時点では早苗さんはただの同級生です。（でも一部の出番はこれで終わりかと）

あとは藤原がただの人間かつモブキャラだったり（たぶん名前さえ出ない）ヤクザの娘も魔眼持ちになっていない（たぶん名前さえ（ry）などの点があります。

時系列的に考えて矛盾はしてないはず…です。

・刀弥さんの能力、そんなだったっけ？

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！俺には刀弥さんの能力を理解しきる頭脳がありませんでした、ごめんなさい…

とりあえず、自分の解釈の下、一度能力を使ってもらいました。案

山子様、これで合っているでしょうか？

・刀弥さんの性格（ry

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめ（ry

極端な話、本編にそのまま組み込んでも違和感が無いような話にできるように頑張って書いたのですが、刀弥さんの特殊な言動、性格は把握できませんでした。

特別な存在を書くのって難しい、その点オリジナルチートキャラを書けている作者様方は凄いです。本気で。

？「人様のキャラクターを借りというて、できなかったで済ませようってのか？」

ああ、名前すらないオリキャラさんですね。こんばんは。

？「少なからず自分をモデルにしてるくせに、その言い方は無いだろ」

自分をモデルにしたのは案山子さんをモデルにした刀弥さんと並べるキャラならばその方が相応しいんじゃないかと思った結果だ。他意はあんまり無い。

？「おかげでスペックすら…単体じゃあほとんどノーマルみたいなもんだもんなあ」

単体では、ね。

？「…条件満たしても使い勝手悪そうな力じゃないか？」

そうでもないと思うが、それでは今回はこれにて。

？「えっ」

よろしければ、次回もお付き合いください。ありがとうございました。

第一部 第二話裏 道中（前書き）

次からは変な悩み方はやめて、週に1〜2話投稿するようにしよう
かと思っています。

それと、2話なのに2話じゃないですね。今回のお話。

第一部 第二話裏 道中

? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

いつものように、思い描いた世界へと堕ちて行く。

いつものように、夢幻の世界へ溶けていく。

僕達……いや、俺にしてみれば世界と世界を隔てる壁など簡単に越えられる。

この世に存在するありとあらゆるソレを、取っ払う。それが俺たちの存在であり目的。

そうさ、俺は全てを思いのままにできる。

だって、俺が世界を変えるんじゃない。

世界が、自分^{おれ}で変わるのだから。

俺は世界そのもの。俺は全存在。

その一方で一個体である。それが俺、

個と全の融合体、全てでありながら全てでない存在。

全の存在と、個の存在が一つとなって生まれる最高の存在が今の俺。

そう、俺こそはデタラメで狂気な――――

A M 7..53 ー ○○市住宅街

side ???

どうやら着いたみたいだな、ここが『黒羽刀弥』のいる世界か。
ああ、するべき事はいつもと同じ。

「あいつみたいなの素敵な個体はなかなかいない。是非お友達になつてもらおうとしようか」

決意を新たに、とりあえず周囲をもう一度見回してみる。
自転車に乗った高校生達が沢山通り過ぎて行く……
そうだ、あいつも一応高校生なんだよな。じゃあまずは学校に行くところから始めるとしよう。

「……つても制服が無いな。まったく、準備が悪かったか？とりあえず、自前の学ランでいいか」

俺も一応、元の世界では高三の学生だしな。学生の正装、学ランぐらいは用意してある。

制服が学ランの学校は一見どこの生徒か見分けがつかないから、今日一日学校に潜り込む位は問題ないはず。

「うまくやればだけど…」

とりあえず、登校中の生徒の中に混じって一番近くにある高校を指す事にした。

たぶんそこに、あいつはいる。

「待ってろ、黒羽刀弥」

少年移動中…

side out

AM 8:28 — ××高等学校正門前

side Ryuji

あぶねーあぶねー、朝っぱらからガラの悪い連中に絡んで…じゃなくって！絡まれたから遊んでやってたら遅刻ギリギリだぜ！

こんな時間に門をくぐるのは久しぶり……あれ？

「その生徒さん？息も切れ切れのところ失礼ですが学校をお間違えでは？」

「はあ、ふう…やっぱり準備ナシで来るのは無謀だったかな……」

なんとも珍しい事に、我が校の門をくぐろうとしている他校の生徒に遭遇した。

こんな事、1年と数ヶ月通ってる中で初めてのことだな。

あ、学祭とかの例外は除いた上でな？それでも制服で来る奴は見た

こと無いか。

「君も歩き…というか走り？家近いの？」

「かくいうそちらさんはそもそも何用で我が校へ？どのくらいの距離を必死に走ってきたかも気にはなるけど」

この時間帯に学ランを着てここにいるなんて、まるで他校の生徒であることを誤魔化して校舎に入ろうとしてるみたいだ。
……って、んな事あるわけ無いけどな。

『キーンコーンカーンコーン』

まじい、正体不明の誰かさんと喋っている途中で、朝のHR開始のチャイムが鳴った。

どうする、このままじゃ遅刻だ……！！

「ザ・ワールド！！時よとまれ」

こいつが誰だろうと知った事か！今はそれより我が身が大事！
ああ神よ、俺はこの時ほど俺の持つ財産に感謝する瞬間は無いぜ！
全速力、一気に校内を駆け抜けて教室の自分の席まで減速すらしな
い。

「着席！そして時は動き出す」

まったく、こんなくだらない能力の使い方は初めてだぜ。
にしてもあいつ、なんだったんだ？放っておいても大した害は無い
と思うけど……

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

A M 8 .. 2 8 ー × × 高等学校正門前

はあ、ふう、やっと着いた。周りはみんな自転車なのに、俺は自分の足だからなあ。

「その生徒さん？息も切れ切れのところ失礼ですが学校をお間違えでは？」

……早速ばれるとは、俺が樂觀視しすぎたのかな？それとも彼の観察力が高いのか……

「はあ、ふう……やっぱり準備ナシで来るのは無謀だったかな……」

とりあえず別の話題でも振ってみるしかないな、誤魔化せるかはわからないけど……

「君も歩き……というか走り？家近いの？」

「かくいうそちらさんはそもそも何用で我が校へ？どのくらいの距離を必死に走ってきたかも気にはなるけど」

『キーンコーンカーンコーン』

んだよ畜生、食らいついたら放さないってか？面倒なのに捕まったもんだ「ザ・ワールド！時よとまれ」

ん、なんだよいきなり大声出したりしてよ。ってあれ？どこ行っただあいつ。

……消えた？馬鹿な、この世界ではただの高校生が特殊な能力を持つてゐる事なんてあるはずがないはずだ。奴は一体、何者…？

「って、該当者がいるじゃないか。一瞬で姿を消せる能力、『時間停止能力』を使えて、この学校に通う生徒といえば」

十六夜咲夜。紅魔館にて吸血鬼レミリア・スカーレットの従者として働いている完璧で瀟洒なメイドさんが。

まさかこっちの世界にいる間は男子生徒の姿を借りているとは、流石に思いつかなかったぞ。

「……あるわけないか。この世界に来てもう三十分以上経つのに、まだ記憶が混乱しているようだ」

「おい君、君が転校生の波木君か？」

校舎から教師らしき人物が現れ、急に声をかけてきた。

なるほど……『転校初日で新しい学校の制服が用意できていない転校生』か、たしかに今の俺にぴったりの役柄だ。

「あっと、はい。そうです。あのすいません、まだこの辺に慣れてなくて遅れちゃいました……」

「道に慣れてなくて遅刻か。仕方ない、今回だけは大目に見るからついてきなさい」

それっぽいことを言って適当に誤魔化す。

本当は他の登校生徒についていだけで道には迷わないんだろうけどな。

ってか、まさに今の俺がそうだし。

あ、そういえばあいつに無駄に怪しまれちゃったな。次会った時に転校生って言えばいいけど。

「しかし、君の妹はもう着いてるみたいだぞ？朝一緒に来なかったのか？」

「いも……うと？」

たぶん、バグか。あいつ、留守番してろと言ったろうが全くよ……

「（お前が黒羽に殺されたら計画が潰れるだろうが……）……少しは考えろっての」

「さては朝妹と喧嘩したんだろ。本当はそれで遅刻したんだな」

何故かは知らんが先生様は少しご機嫌だ。確か今はあいつが校長を金で揺すって、イケメンさんを弄んだ後のはずだから……

ああ、さては校長に奢ってもらった約束でもしてもらったんだな。それで今日一日夜が楽しみってわけか。

「飲みすぎは体に毒ですよ」

「?…まあそうだな、ほらこの階だぞ」

side out

side Ryuji

AM 10:36 — とある教科の特別教室、刀弥の少し後ろの席

我が親友よ、お前はいつからそんなに遠いところへ：リア充羨ましい。

side out

side Toya

AM 10:37 — とある教科の特別教室

「流石は私の夫だけあるわね、刀弥」

「お前にとっても簡単な事だろうに：それにお前の褒め言葉は時々皮肉が混じってそうで怖い」

今俺は、とある教科の実践授業で特別教室にいる。

何の授業かって？そんな事はどうでもいいだろ。

「今日は早いとこ授業をこなして、向こうに行く準備をしなきゃならないからな。いつも以上に完璧にこなすのも当たり前さ」

「フフフ：大切にしてもらえてって幸せな事ね」

「刀弥！今夜はわたしだから忘れないでね？」

基本的には準備なんて着替えを纏めたりするぐらいかもしれんが、
楽しみ事の準備はしっかりするのが基本だからな。

まあ、忘れ物とかあっても能力で何とかなるから本当に気持ちの問題なんだけどな。

「フラン、そういう事は目の前の作業を終わらせてから言え」
「はい！」

……いつも通り、のはずなんだがな。何故なんだ、胸騒ぎがするのは…

side out

side ??? (Yusuke)

AM 10:39 — 3年△組教室

「えーっと、それでここを……波木君だったっけ？わかるかい？」

「すいません、前の学校での授業と進め方が違うみたいで……」

「そうか、あとで前の学校でやってた範囲を教えてくれ。君に勉強する意欲がある限りは協力するつもりだから」

「ありがとうございます、先生」

さて、なんだかんだでこの生徒として潜入中の俺なわけだが。

波木 なみぎ 祐助 ゆうすけ っていう名前にも不満はあんまり無い。黒羽の学校の生徒になつてゐる事も文句なし。

一時間目は担任の先生様のご好意で自己紹介タイムとして消化できたから良い時間をすごせた。

どうせならイケメンに来て欲しかった、という女子の声が胸に刺さったがまあそれもいいとする。

そこそけどこいつらと打ち解ける事ができたのもよかった、どうせすぐ別れる事になるだろうが。

いい環境だ。感動的だな。悪くない。でさ、なんだよ、聞いてないよ。

「――で、次の問題。ちょっと難しいからじっくり考えろよ、3 以上の自然数 n について、 $xn + yn \parallel zn$ となる 0 でない自然数 (x, y, z) の組み合わせがない。これを証明しなさい」

無理無理無理無理無理！！なにこの授業内容。本当に俺と同年代のこいつらは理解して聞いているのかよ、バケモンだろ。

何なの、何なのさこの授業内容は！進学校って何？勉強したい奴は塾でやれよ！授業の時点で難しい学校とか誰得だよ！

「（なあ波木、お前北海道から親の都合で来たんだって？蟹食った事あるの？）」

「…悪いけどそういう話は休み時間にしてくれないか？」

今はただでさえ頭が、うおお…

「こら木原、授業中まで珍しがつて転校生に話しかけるもんじゃないぞ。ほら、この問題はお前がとけ。いいな？」

「先生、毎回授業を聞かずにP○Pか携帯弄ってる俺にできるわけ無いじゃないですか！」

まあ、どこにでもこういう奴はいるもんだよな。
ていうか、威張るな。

「ほう、どうやらまた没収されたいようだな……」

「ナシ！やっぱナシ！それ解くから今回は勘弁！！」

……午前の授業はコイツを煽って、時間稼ぎして誤魔化す事にするか。

昼休みで黒羽を呼び出して、早いとこ用事済ませて、この学校からは早々に立ち去ろう。

いくら怪しまれず近付く為とはいえ、こんな面倒な学校とは思ってなかったなあ。

side out

side Ryuji

PM 0..46 — ××高等学校 購買部前

さて、何故俺は誰より早くこの場所に来ているのか？少し問いかけをしてみよう。

非リア充諸君は『弁当は彼女が作るもの』という幻想を抱いているかもしれない。

しかしな、ここにある現実を見ろ！

「正解は、彼女の分も弁当を買いに来る男子でした……どうなのこれ」

「あんまり過ぎた冗談言っていると、彼女さんにお仕置きされちゃうんじゃないの？」

缶ジュースやらを引っさげて、愛する者の所へ戻ろうとしたその時！赤いラインの上靴を見るに、一年生と思しき割と普通っぽい少女に声をかけられた。

髪は短め、スカート丈普通、胸は……ゲフンゲフン、今はいいとして。

心当たり？全く無い。てか誰…？

「僕が誰かはどうでもいいから、黒羽刀弥の友達でしょ？」

「ああ、あいつなら俺の親友だけどそれがどうかしたか？」

あいつの事で声をかけられる事、それ事態はそう珍しい事じゃない。不良グループが借りを返すとか言ってつれて来いといったり、女子がラブレター渡してくれと、俺を郵便屋に使おうとしたり。

「大体分かった、それで俺はどうすればいいわけ？」

我ながらイケメンな対応だ、全俺が惚れるのも無理はない。見たところ今回は後者だろう。女の子が先輩呼び出して喧嘩売る、

とか漫画でも見たことねーよ！

〇〇渡しといてゝ系だったら断ってやってもいいが、自分でする気のある子なら聞いてやるぐらいはいいか？

「この昼休みの時間中に、体育館裏に来て欲しいんだけど。黒羽先輩に」

「わかったわかった、他はいいか？それだけか？」

最近刀弥のアドレスだけ聞こうとする輩もいるからなあ。
その点、この子はマシな部類か？

「あ、そうそう。会うのは…そこにいるのは私じゃなくて、3年の先輩だから」

「そうかそうk…はい？」

前言撤回、どうやら今度の子も根性ナシみたいだな…

「俺そういうパシリみたいな真似はちよっ」「いいから頼んだよ、隆二先輩」あ、おい！」

…かといってすっかり断れなかったのに『伝えませんでした』もないか。

「しょうがない、キューピッドなんて俺には似合わない役柄なんだがなあ」

俺は可愛い天使としての役目を果たすべく、教室に向けて歩き出したのだった。
エンジェル

side out

Side Bug

PM 0..48 — 3年△組教室前廊下

「とうわけで、かわいい後輩が代わりにお仕事してきてあげたよ」
「うむ、御苦労」

頭をなでなでしてもらえる、この瞬間に感じる幸せは何ものにも変えがたい。

これが今の、僕の存在理由だから。

「と言うと思ったか、勝手にこの世界に来る事を許可した覚えはないが？」

「かといって拘束もしない、そうでしょ？現に僕の頭をなでてくれてる」

悩んだような表情を見せる彼。

彼を困らせるつもりは微塵も無かったけど、自分の行動で彼がこうなると分からなかったわけではない。

少しだけの罪悪感はあるけど、彼はこのくらいのことは許してくれる。

そんな彼の甘さにそのまま甘える。そんな自分が少し情けないけど。

「……どうでもいいけど、何で女子の体使ってるんだよ」

「なにか変？元々僕は女の子の体だったよ？」

今時一人称が僕の女の子もそんなに珍しくないし、正直これでいいかな？と思ってただけ。

「お前、心が男d」それより早く行って来たら？彼、来てるかもよ」
……あとでゆっくり話をしようか」

我が親愛なる恩人を見送り、少し遅れて自分もやり取りが見えそうなポジションに移動する事にした。
マスター

あ、そういえばお兄ちゃん、って呼んであげれば良かったかな？

……気持ち悪がられたら嫌だからやめておこうと。

s i d e o u t

第一部 第一話裏 道中（後書き）

今の時刻は24…15 2010/10/16であり、決して俺は遅れてませんよ？

祐助「遅い、百回程死ね！」

といっても無能者の誰かさんじゃないですか。…包丁は人に向けるものじゃないですよ！。

祐助「お前が人ならな。しかし第三者が目撃した時点では肉塊だったらどうだ？」

コラコラ、次からはこの程度の内容にこんな時間かけませんから。といえますか、私も今週あたりはいろいろ忙しかったので仕方なかったんですよ。

祐助「山登りに行って帰りに温泉行ったりはできるのにな」

ほら、山の上から見える景色って幻想郷の描写の参考になるかな？
と思って

祐助「……次はない」

それは次話の投稿が当分ないってことかな？

祐助「トマホーク・ブーメラン！」

トマホークじゃねえ！コントロールひでえ！

祐助「掠りもしそうにないなら当たりに行けよ」

俺どっちかというところSなんだけど…皆様、今回もありがとうございます。

刀弥さんらしさが崩壊しているかもしれません、どうしてこうなった。

あ、もちろん今回で終わったりしませんよ？

第一部 第二話 訪問者死亡確認、『幻想郷訪問録』訪問録。 終了？

side Toya

PM 4:00 — 体育館裏

「放課後、指定の場所に來られたし…あんたか」

「ザツツライト。昼は待ちぼうけくらって寂しかったぜ？」

さて、今俺の目の前には例の呼び出し人がいるわけだが。

今日の授業が全て終わって、帰りのHRをしている最中だった。

窓から紙飛行機が教室内に入り込み、俺の机の上に着陸した。

周りの生徒は気にしていないが、認識を操る簡易的な術でもかけてあるのか？

…もちろん、紫達は俺の手の中のこれに注目しているようだが。

「それで明日の連絡事項は以上かな、模試受ける奴は金と申込書を忘れないように」

紫に視線を送るも、首を横に振るだけ。

レミリアにも視線を送るが、首を横に振るだけ。

いつもなら何でも知っていそうな大妖怪に、運命を操る吸血鬼。

…お前達にも分からないか。じゃあそれほど大それたものでもないのか？

あまり大きな力が関与しているなら、こいつらにも俺にもその気配を感じさせないなど不可能に近い。

見たところ危険な呪術の類が施されている気配もないから、直接的な害も皆無に等しいだろう。

「忘れるところだった、PTAの茶話会の紙も早めに出してくれ。集計が面倒なんだ」

紙飛行機を広げてみると、『指定の場所に、すぐにでも改めて来られたし。』という一文がまず目に入った。

特段魔術的なモノを使って書かれたものでもなさそうな、普通の文字。

そして、紙の下のほうにもう一文『※人間のあなたが一人で来る事！』とも書いてあり。

「それじゃあ今日はこんなところか。号令」
「起立」

ガタガタと音を立てて、鞆を肩にかけ、生徒一同起立する。

「礼」
『さようならー』

がやがやわらわらと、教室から廊下へ次から次に流れ出ていく。

そんな混雑の中4人と合流し、先に帰って待っててくれとだけ伝えた。

書いてあったのはあの二文のみ、普通は読み取れない特殊な手掛かりもなし。

しかし相手が何者かは不明ながらも、危険な力の持ち主である可能

性は極めて低そうだ。
あとは会っての、お楽しみ。

して、今この状況に至る。相手は一人、周囲にも仲間の気配はない。

「それで、何のようです？俺の時間も安くはないので、手短にお願いしたいのですが」

「まったく予想通りの性格だ、が！少し社会経験が足りてないものの言い方だな」

ニタア：という言葉が似合う笑いでこちらに視線を向けてくる。
いざ会ってみると、やはりそういう意味で警戒すべき相手には見えない。

それにしても、失礼な事を言う奴だ。初対面から上から目線で、相手の言葉使いを指摘してくるとは。

「髪型は角刈り、身長は170あるかどうかといったところで体格は普通。髪を染めたりはせず、むしろお手本にしたいぐらい普通の学生に見える」

「パーフェクト。しいて言うなら角刈りでなく、スポーツ刈りと訂正したいぐらいか」

相変わらぬニタニタ顔は、その奥にある真意を読み取らせない。
外見は絵に描いたような普通の高校生、だがおそらく：

「『特殊な目』で見ても、あなたは至ってノーマルだ先輩。一体ど

こで、何を嗅ぎ付けた？」

「先輩、か。やっと敬意の欠片を見せてくれたか。まあ、お堅いのはこの辺にして柔らかく本題に入ろうか」

右手を差し出して握手を求めてくるので、今はとりあえずそれに応じる。

…この手、何か独特の感じを受けるがその正体まではわからない。

「初対面の基本は自己紹介だよな？初めまして黒羽刀弥君、三年の波木祐助だ」

「初めまして先輩、ご存知のようですが一年の黒羽刀弥です。…人間の、黒羽です」

どう出てくる？ここでそれらしい反応を見せなければ、シロとんでもいいところだ。

手紙の件は紙飛行機を飛ばすのが上手で、ちょっと面白い事が書きたくなったとでも捉えれば多少の無理はあるが理解できなくも……流石に無理か。

「紫様は俺も一度懂れた事があったよ。曲と服のセンスが俺好みだね」

「…やっぱりそっち側の住人か」

鋭い目つきで相手の動きを一つ一つ追っていく。

要するにただ睨みつけているだけだが、それが一番早くて適度なプレッシャーになる。

「そう警戒するなって、別にお前をとって食おうってわけではない……わけではないかも？」

即座に身構え、臨戦態勢に入る。

目の前の対象だけで、何か有効な攻撃手段を持っているとは思えないが保険もかけておく。

「『お前に俺は殺せない』。無論、遊び半分で遊ぶ事もな」

「ほう：それが例のチキンカードか、蛇だけど」

やはり、こいつはある程度知っている。

放っておけば害にこそならないのかもしれないが、わざわざ呼び出してきたのも気になる。

まずはどこまで知っているのか、それを把握すべきだろう。

「呼び出したくらいだ、用があるんだろう？」

ポケットからボールペンを抜き、いつもの銃に変化させて突きつける。

「自己紹介は済ませた。それじゃあ早速だが目的とどこまで知っているか——いや、何故知っているのか正体を明かしてもらおう」

ずっと笑いの表情だった顔も流石に歪み、今度は苦笑いのような顔に……結局笑いは外せないんだな。

まあいい、それからゆっくりと口を開いて、説明を始めた。

「しょうがない……お見せしよう」

学ランのボタンを全て外し、腰の銀色のバックルが露になった。両の腕を右にまっすぐ伸ばし、弧を描くように上、左と持ってくる。拳は握られ、左右の拳から肘までの部分が逆L字型を形成する。

「正義、 仮面ラ○ダー2号」

「……とてもそうは見えんが？」

ポーズを決めると、キリッとした顔で言い放った。

姿は人間のまま……どころか、こいつはやっぱりどう見てもノーマルでしかない。

「少なくとも現段階では、お前はシロにしか見えない。次ふざけたら命はないと思え」

本来なら大事な者たちと幸せに過ごしている筈の今という時間。それをこの無礼な男に汚されているのだ、全く持って不愉快だ。イライラが次第に募っていくのも、当たり前前の事というものだ。

「ふーん、そうか——じゃあ、 もういいか」

元々あまり褒められた目つきはしていなかった奴だが、明らかにその視線に卑しさが増した。

身に纏う雰囲気さえガラリと変わり、一応は清潔な感じが根底にあるように見えていたものが、それさえドス黒い何かに変わった。

「幻想郷で言えば、地底の彼女なんかは解るかもしれないな。俺の中にいる存在が」

「幻想郷の存在も知っているのか——改めて聞く、どこまで知っている！」

銃を構えなおし、聞いたです。

銃口を見つめる事数秒、突然祐助先輩は腹を抱えて笑い出した。その笑い方たるや、初めて出会ったときのフ란のそれを想起させ

るほど、狂気を含むものだった。

「おお、流石は『薄汚い殺人鬼』さんだ。言う事が違うな！一人殺そうが、二人殺そうが、変わらないと思ってたりするの？」

俺の能力のことを、知っていないながらこの挑発——まさか、こいつの目的は怒りで制御が利かなくなった状態の俺の力を試す事なのか？俺の力見たさにやっている事……なのだろうか。それにしては、腹の底からそう思っているようにしか聞こえない気がするが。

——それにそんな事はどうだっていい。これ以上コイツが俺の機嫌を損ねる態度を取り続けるようなら、流石に見過ごせない。

「ラストチャンスだ。目的と正体を明かせ」

「もう俺を殺しちまうのか？いくらなんでも早いだろ、そいつはちよっと異常な気の短さだぜ？」

ダメだ、話にならない。こんな奴はしっかりと浄化してやらないといつも通りあらかじめ撃ち抜いた結果を創り出す。今回は『両手両足を撃ち抜いた結果』だ。

それから銃を左足に向けて、引き金に指をかける。

「この程度で殺すわけにもいかないだろう？俺はそこまで沸点の低い奴でも無いしな」

相変わらず狂った笑い声を上げているが、それも今に苦痛と恐怖に変わるだろう。それを思うとゾクゾクする。

「命はとらない、教育してやろう。恐怖と苦痛の末、絶望を味わえ」
「親の教育も受けずに教育を説くだ？笑わせるぜえ……ハハッ！」

ピタ、と体の動きが止まる。全身が硬直し、頭の中は目の前の事意外真っ白になる。

——こいつは今、なんと言った？
いや、これから何を言おうとしている？

嫌な予感が体中に走り、脳からは『早く撃って、口を開かせるな』と指令が出ているのを感じる。

心は怒りに支配され、引き金にかけた指が震える。

「これ以上喋るな、口を開くな！ 黙れ、黙れ黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！」

「お前の親は愚かにも交通事故なんかで死んだんだったな。まだ幼いお前一人を残して！ まったく、そんなの親失格だろ。愚か者もいいとこだぜ」

引き金を引く、引く、引く……激情に、身を任せて。

怒りの感情だけが我が心といふかのように、その負の感情に流されるまま。引く。

「あ
あ、あ
あ、あ
あ
ああ
ああつ！」

目の前の男は痛みのあまりか、声にならない声というような奇声を発した。

しかし何故だ、どうしてあたらない！さっきから俺は心臓を狙っているのに、全部狙いから外れて命中している。

次々に手足の肉が千切れ飛んでゆくが、こんなのはどれも単体じゃあ致命傷にならない。

こんな奴、早く殺してしまいたいというのに……

「そうか、初めから手足だけを確実に撃ち抜くようにしてたんだっ
たな」

「……………」

もう口も利けないみたいだが、こんな奴が同じ世界の空気を吸っているかと思うと寝覚めも悪くなる。

まだ生きている以上、しっかりと始末してやらなきゃな！

「小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はOK？……ククク、もう少し早く聞いてやればよかったかな？」

銃で両手両足を吹き飛ばされて達磨同然になっているソレに、そつと近づく。

先程作り出した結果を破棄し、頭に銃口を押し付けて引き金を引く。あっけない終わりさ、銃弾が打ち出されたこの音が。お前の、最後の声。

「……この距離で外す馬鹿はいない、零距离なら素人でも目標を撃ち抜ける」

顔に飛んできた鬱陶しい返り血を袖でぬぐい、沈黙した肉塊の頭部を踏みつけた。

その頭部からも中身がいくらかはみ出ていたり、グロテスクな光景が一带に広がっている。

血、血、血。赤黒いペンキは存分に撒き散らされ、時折人間の指らしきものなどが転がっている。

「これで二人目……今の俺ならいくらでも揉み消せるし、消された

ほうも屑だから問題はないが」

人を殺したというのに、罪悪感も欠片も感じなかった。
わざわざ罪に思うほどの殺人ではなかったのだ。それどころか、本当に殺人であつたかさえ怪しいと思える。

「dust to dust、塵に過ぎなかったものが塵に帰っただけだ。さあ、後片付けが必要だな」

『何一つ争いごとはなく、銃声一つ響く事はなかった』という結果を周辺全域に上書きする。

肉片も血もどこへやら。美しいお呼び出しスポットは元の姿へと返つた。

——ただ一点を除いて。

「なんだ、紙飛行機…？」

目の前に白いソレがポツンと落ちていた。とりあえず拾い上げ、土を払う。

それから紙飛行機を開いて一枚の紙の状態に戻すと、そこには見やすい大きさの文字で一文が連ねてあつた。

こんな事を俺にしてきた事がある奴は、今まで一人しか記憶にない。差出人は恐らく……

『今度は護身のためじゃないから快樂殺人だね。おめでとう、黒羽刀弥。君もこれで、立派な狂人だ！』

紙をクシャクシャに丸めて地面に投げつける——と、後頭部に新しい紙飛行機が当たって、地面に落ちた。

咄嗟に、これが飛んできたであろう方角を見る。すると、一瞬だけ

人影を視界に捉える事ができた。

残念ながら誰かまではわからなかったが、とりあえず手掛かりの紙飛行機を拾い上げてまた開く。

「……あんたは一体何者だ、波木先輩」

そこに書かれていた文章を読み、脱力する。まったく、面倒な相手に目をつけられたものだ。

魔力霊力の類も能力の使用でいくら消費しているし、今日はもうすぐにでも帰ろう。

俺を愛してくれる彼女達と、楽しい週末を迎えようか。

ああ、本当に今日は無駄に疲れてしまった。

短時間で色々あったこの場に背を向け、俺は一人遅れて、家を目指して歩き出した。

side out

side Letter no. 3

『という冗談はさておいて、実際のところだが俺はまだ死んでないんだよ。残念だった、と思っているかもしれないが許してくれよ。じゃあどうなったか？という話だが、それはまだ秘密だな。そう、今しばらくは。』

この手紙を通して伝えたい事は以下の二点だ。

一つ、色々怒らせる事ばかり言ってしまったし、そういう態度も取ったが本心ではない。すまなかった。

一つ、俺の正体はまだ秘密だが、当面の目的はお前と友達になる事。お前みたいな奴と仲良くやれば、どんな世界も楽しく生きていく事ができそうだ。

という訳で俺はお前と友達になり、仲良く遊べるその日までお前につきまとうことにするぜ。

それじゃあよろしく、新しい俺の友達。

親愛なる友人 波木 祐助少年より』

s i d e o u t

現在時刻は25..57 2010/10/20にございます。

祐助「またか」

まただよ、さらに言うとその後本文をあと2回ほど見直して誤字と
かも探さないと。

祐助「……………うわぁ」

仕方ないんだよ、予定内の都合が入って忙しかったんだから。
あ、そういえば手羽先が食べたい。

祐助「予定外じゃなくて予定内かよ、都合つけとけ！そのぐらい」
死人に口はなし。という訳で次回からバグがこのコーナーの担当で
す。

祐助「——え？俺死んでないんだよね？」

さぁ？書き手の気分しだいじゃないの？
私は舞台設定と目的さえ決めたら、キャラに勝手に動いてもらって
書く人なんで。

祐助「つまり、行き当たりばったりって事か」

その通り……………って！大事な事を忘れていた！

祐助「あ、本来なら最初にするべきだったあれの事か？」

本家訪問録作者の案山子様や読者の皆様方、大変申し訳ございました。刀弥さんがこんなキャラになってしまいました。

祐助「前はともかく、今回は結構本家本元からずれてしまったんじゃないかとこいつなりに悩んだらしいな」

結果、開き直りました。なろう内で誰かが言っていた、『二次創作とは、原作デストロイである。』と。

bug「必殺、回し蹴り」

ぐふっ…いや、自分的に刀弥さんを表現しようとした結果なんですよ！しょうがないでしょう？

祐助「言い訳無用、スキマに落ちてヤツメウナギ地獄でも味わってやがれ」

あれ、足元が……わーいあこがれのスキマ空間だー。

祐助「今回もお読み頂きありがとうございます。今回のような話のときは特に、感想お待ちしております」

bug「また見てね！」

番外部 第二回 Oの設定／今は筆を休めて（前書き）

ちょっと気分転換に書き出してみました。あんまり強くないことを改めて実感します。

番外部 第二回 Oの設定／今は筆を休めて

異世界からやって来た、とかいうディケ○ドみたいな設定の人間

名前…波木 祐助 (なみき ゆうすけ)

身長…167cm

体重…60kg

走力…常人程度

パンチ力…常人程度

キック力…常人程度

ジャンプ力…常人程度

種族…一応普通の人間

容姿…刀弥さんの説明通り、一般的な男子高校生で髪型はスポーツ刈り(ようするに角刈り)。一般的なのでイケメンでもない。

性格…気に入れば誰にでも愛を囁く。この世の全ては愛されるために存在していて、自分は全てを愛する者と思っている。

好きな○○…愛せぬものなど、あんまりない。尊敬している人物は父親。

嫌いな○○…あんまりない。というか、ない。

ゝ程度の能力…人を怒らせる程度の能力

黒羽刀弥の在学中の学校に転校してきた3年生。元々いた学校はレベルのあまり高くない授業をしていたらしく、転校初日の授業はさっぱり理解できなかった様子。

結局、彼が2日目以降の授業を受けることはなくなったが。

転入早々に黒羽刀弥に接触、わざと機嫌を損ねる発言を重ねることで彼に殺されている。

バグの発言によれば『計画通りの事』らしいが、それによって何を

成そうとしているかは未だ不明。

黒羽刀弥当人には「当面の目的はお前と友達になること」と手紙で伝えているが、「当面の」である以上、最終目的は別にあるようだ。

波木 祐助というのは本名ではなく、この世界にやってきた際に得た偽名らしい。

実は本当の名前を持っていないのかも……？

おまけで憑いて来た、人の世の闇が生んだ蟲。

名前…ヴァニシング・バグ

身長…148cm

体重…33kg

走力…100mを3.5秒

パンチ力…0.5t

キック力…3t

ジャンプ力…一跳び10m

種族…主に飛蝗、時々蠅螂の特性を持つ妖怪的存在。

容姿…普通の人間の少女の姿。髪は黒くて短い方。

性格…彼と出会った頃は捻くれた性格の持ち主であったが、彼に連れ出されて色々な世界を旅するうちに明るくなっていった。

好きな○○…純粹な心、愛情など。

嫌いな○○…歪んだ愛情、いじめなど。

ゝ程度の能力…自身を消す程度の能力

ロリボディ in ショタハート？ 実は一人称の「僕」以外は男の子要素がないので実際はほぼ女の子。

元々はどこかの世界の一人の少女の心から生まれた存在で、自分の

肉体すら持っていない精神だけの存在だった。

過去話は何処かで挟むかもしれませんが、一応元ネタのあるキャラクターです。

元の話があまりに救いのない話だったので、「もしも」な感じで彼にくつついてきてもらいました。

でも設定いじりすぎて元の面影が全然なくなり、結果完全オリキャラに。

仮面ラ○ダー電○に出てくる、イマ○ンと元ネタの昔話程度の関係ですね。無関係じゃん。

『自身を消す程度の能力』ですが、実態は『いつでも存在消滅レベルの自殺ができる能力』みたいなものであってこいしちゃんみたいに便利なものじゃありません。残念ながら。

所持スペルカード

跳符『飛蝗の跋扈』

どこからともなく現れた飛蝗たちが、あんな事やこんなことをします。

STG風にいえば、緑と黄色の丸い弾が微妙な速度で上から降ってきます。

切符『リストカットと流れる血』

読み方はもちろんきっぷです。切符と書いてきっぷです。

バトル的には赤い色をした、斬撃による衝撃波的なものが出ます。

STG的には赤い弾幕で画面が染まります。そういえばお嬢様も血がお好きでしたね。

消滅『パーフェクト・ヴァニッシュ』

発動中のみ自身の存在を消し、その間真っ白な灰が辺り一帯を風に

乗って吹き抜けます。

STG的には本体が一定時間消えて、白くて小さい花映塚によく出てくるような玉が大量に押し寄せます。

番外部 第二回 Oの設定／今は筆を休めて（後書き）

ライダー好きなもんでつい……バグのスペック表で遊んでしまいました。

でもこの程度じゃチート主人公の皆様にはかなわないからいいかな？と感覚が麻痺していたり。

祐助さんがしょぼいのはいつか言っていた「単体の状態」だからです。

まして私の場合は『〓程度の能力というのは個人個人の特徴や持っている能力を、幻想郷住民の皆様が呼称を統一したもの』

であって、突然覚醒して無双するためのものではないと思っていますので。ええ、とびきりしょぼいです。

現時点ではこんなもんですね、スペルカードの有る無しでこんなに設定量の長さが変わるものとは。

スペカを考えたことなんてなかったので、正直こんなに恥ずかしいものだとは思ってませんでした……せつかく作ったからには全部使用しないと！

他の設定は、祐助さんが隠し玉を出した頃にもう一回くらい書くと思います。

……その時はあとがきに載せれば、それで足りそうな気がします。

第一部 第二話裏 コンティニューする？ あと〇回（前書き）

一話の時以上に表の存在あったの裏になってますので、表を読んでからじゃないと描写がスッカスカ過ぎて意味不明です。べ、別に手抜きしたわけじゃ（ry

第一部 第二話裏 コンティニューする？ あと〇回

side Y u s u k e

P M 3..58 ー 体育館裏

「最近一人のイケメン少年が半殺しにされた現場に、俺はいるわけだが」

「それは何故か？ それは俺が今まさにその素敵な大馬鹿者と同じ道を歩もうとしているからだ、むしろそれ以上」

「標的が俺の呼び出しに応じたなら、もうすぐここへ来るのは確かな事だろう」

「死へのカウントダウンというのは気持ちのいいものじゃない、今『幻聴こえる』この足音こそ死神のそれなんだろうな」

自分でも思うが、相変わらず俺は独り言の多い男だな。

今までの自分を分析すれば、独り言が出てしまうのは主に肉体的に疲れている時や、精神的に疲れている時、あとは緊張してる時か。

「声を出せば気合なんて出るものだろう？ その結果道行く人に変な目で見られても安い代償さ」

加えて、今いる場所は人がそうそう来る場所じゃない。

つまり、これも幻聴でないならこの音は標的ヤツの近づく足音。

……噂をすれば、やっぱりな。

「放課後、指定の場所に来られたし：あんたか」

警戒の色が伺える表情、今は武器を持っている様子もないけどいつ

でも俺を殺せるんだろうなあ。

当然、恐怖で体が震えそうになる。俺人間だし。目の前にいるこの男が今から俺を殺すことになる訳だし。

名実ともに自殺志願者って状況だし、今の俺は。

「ザツツライト。昼は待ちぼうけくらって寂しかったぜ？」

かといっておびえてる様を見せるわけにはいかない。めいっばいの不快感を与える、余裕たっぷりな奴を演じなくては。

——やっぱり、あんまり痛い死に方はやだなあ。

「……………」

「……………」

お互い無言の時間がすでに三十秒くらい経過している。いや、怖くてそう錯覚してるだけかもしれないな。

おそらく今までの流れを頭の中で再確認、最初の言葉を選んでるんだろう。

一応向こうから見たら未知の敵との遭遇だしな。雑魚けども。

「それで、何のようです？俺の時間も安くはないので、手短にお願いしたいのですが」

「まったく予想通りの性格だ、が！少し社会経験が足りてないものの言い方だな」

悪くない返しだと思う、いい感じの挑発にはなってるだろう。

問題があるとすれば台詞回しがかなり頭悪そうなところぐらいで。

……なんだよ、頭悪そうなこと言ったからってっぺんから下までジロジロ見るなよ気持ち悪い。

いや、容姿的に気持ち悪いのはどっちかというと俺だけど。イケメ

ンチート能力者とかパルパルしい。

「髪型は角刈り、身長は170あるかどうかといったところで体格は普通。髪を染めたりはせず、むしろお手本にしたいぐらい普通の学生に見える」

あれ？なんか容姿に関しては結構高評価じゃないか？

某グラップラー漫画のキャラみたいな顔とか言われる事あったからもっと酷評がくるもんだと。

「パーフェクト。しいて言うなら角刈りでなく、スポーツ刈りと訂正したいぐらいか」

うん、実際違いなんてあってないようなもんだから本人さえどうでも良いんだけどね。

でもとりあえず言う事の一つ一つに噛み付きたかっただけで。

一呼吸置くと、黒羽は不思議な力を感じる目つきでもう一度俺を視た。

これは魔力なり霊力なりを使って身体検査されてるんだろう。残念ながら今度は高評価を得ることはできなさそうだな。

「『特殊な目』で見ても、あなたは至ってノーマルだ先輩。一体どこで、何を嗅ぎ付けた？」

「先輩、か。やっと敬意の欠片を見せてくれたか。まあ、お堅いのはこの辺にして柔らかくく本題に入ろうか」

おそらく今のもう変な警戒はある程度解かれただろうな。

ここまでの流れが堅かった気はしないが、どうにもこいつの俺を見る目はずっと堅いんだよなあ。

というわけで、まずはこれからそう短くない付き合いになるだろう彼に自己紹介でもしてみるとしよう。

「初対面の基本は自己紹介だよな？初めまして黒羽刀弥君、三年の波木祐助だ」

「初めまして先輩、ご存知のようですが一年の黒羽刀弥です。：人間の、黒羽です」

……ちよつと驚いたな、こんなに簡単に握手に応じるとは。

危険性が薄いと判断したのか？それとも警戒を解いたと思わせて油断させたいのか？

まあそれはいいとしても、なんと返してやるべきか。

あんまり知りすぎてる風でもなく、無知でもない程度の言葉を選ぶとなると：ふむ。

「紫様は俺も一度懂れた事があったよ。曲と服のセンスが俺好みだね」

我ながらなかなかベストに近い台詞だと思う。

今回の目的は長々と馴れ合いの言葉を吐くことではないわけだし、緩やかに話の流れを変えるにはいい感じだ。

「：やっぱりそっち側の住人か」

前言撤回、ものすごく警戒心強くなったっぽいです。緩やかなんて大嘘でした。

この世界には『東方project』があるはずだからこの位じゃあそこまで警戒されないと思ったんだけどなあ……

あれ、この時点じゃあ旦那様は黒羽婦人方がゲームに登場してるのと知らなかったっけ？

……とにかくもう少し流れをゆっくりにして、じわじわやりたいな。うん。

「そう警戒するなって、別にお前をとって食おうってわけではない……わけではないかも？」

わあい、このタイミングで口が滑ったとか漫画じゃあるまいし。

刀弥さんの俺を見る目が完全にガチです。うん、もうね、ゆるゆるやるとか無理。

……なんだ、この構え。武道？そういう知識はあんまりないからよくわかんないけど、もう確実に殺せる体勢ばいな。

「『お前に俺は殺せない』。無論、遊び半分で遊ぶ事もない」

ほれみろ、もう何やっても勝ちがないですよー。

元々負けるつもりで来たとはいえ、殺気を向けられるのは気持ちよくないねえ。

しかもやつぱり『俺は殺すけどね』モードじゃないか。ふう、そろそろ死に時かね？

「ほう…それが例のチキンカードか、蛇だけど」

軽く挑発。もうそろそろ殺しに来ると予想。

こんなに沸点低い奴も見かけないってくらいにはキレやすいしな、この時点での彼は。

「呼び出したくらいだ、用があるんだろう？」

例のボールペンから作り出されるという銃を取り出し、俺に突きつけてきた。

……ほう、流石は幻想郷の守護者だけあってそうすぐに殺しもしないか。

この時点の彼の精神レベルなら即引き金を引くレベルかと思ってたりもしてたけど、それはなかったと。

「自己紹介は済ませた。それじゃあ早速だが目的とどこまで知っているか——いや、何故知っているのか正体を明かしてもらおう」

ふむ、どうするか。もう一つゆるい挑発いれて落ちないようなら……せっかくだし長年言いたかった台詞でも言ってみようか。

「しょうがない……お見せしよう」

学ランのボタンを全て外し、腰の銀色のバックルを露にする。

両の腕を右にまっすぐ伸ばし、弧を描くように上、左と持ってくる。拳は握り、左右の拳から肘までの部分が逆L字型を形成する。

そう、まさに例のポーズ。

「正義、仮面ラ○ダー2号」

「……とてもそうは見えんが？」

黒羽はすぐく、冷たい視線を投げかけてきた。

なんだよちくしょう、少しならいけーめんじゃない男の子に見せ場作っても罰はあたらんだろうに。

「少なくとも現段階では、お前はシロにしか見えない。次ふざけたら命はないと思え」

はいはい、わかってますよ。どうせ俺は改造人間でもなければ超古

代の神秘の力もない、ただの人間さ。
少なくとも、肉体はただの人間だからな。

「ふーん、そうか——じゃあ、もういいか」

『次ふざけたら命はない』んだろ？ 守護者様の器もちっちゃいもんだ、たかが人間にここまで怒っちゃってよう。

仮にも、「人を怒らせる程度の能力」が俺の特技みたいなもんだから、相手が悪かったとも言いかもしれんが。

「幻想郷で言えば、地底の彼女なんかは解るかもしれないな。俺の中にいる存在が」

俺だってチートの一つや二つも用意しないでお前の前に現れはしないさ。

ただ、今は使うときじゃないがな。

「幻想郷の存在も知っているのか——改めて聞く、どこまで知っている！」

言葉責めタイム、始まるよ。

死ぬのは俺、壊れるのはお前。

さて、勝敗はどっち？

まあ、まだ一回戦に過ぎないけどな。

「おお、流石は『薄汚い殺人鬼』さんだ。言う事が違うな！ 一人殺そうが、二人殺そうが、変わらないと思ってたりするのかな？」

おいおいどうした、表情から微かに焦りが見て取れるぜえ？
もう臆したか、その程度なのか？

「ラストチャンスだ。目的と正体を明かせ」

「もう俺を殺しちまうのか？いくらなんでも早いだろ、そいつはちよつと異常な気の短さだぜ？」

そうさ、お前は気が短い。驚くほどにキレやすい。
とても護りし者の器ではない。

「この程度で殺すわけにもいかないだろう？俺はそこまで沸点の低い奴でも無いしな」

なにやら怪しげな力が蠢いている。いつもの後出しじゃんけん、いや、先出しって言うのか？

というより、最初はグーでパーを出すようなもんか、アレを仕込んでやがるみたいだな。

「命はとらない、教育してやろう。恐怖と苦痛の末、絶望を味わえ」

たはは。なにその厨二病、高校生にもなってそんな台詞しか出てこないのかよ。

ましてよお、何が教育だあ？お前の人生振り返ってみろよ、

「親の教育も受けずに教育を説くだと？笑わせるぜえ…ハハッ！」

全く、幼少期にろくな育ち方してない奴はこれだからよお！！

「これ以上喋るな、口を開くな！ 黙れ、黙れ黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ

「黙れ黙れ!!」

知るか知るか知るかッ!!!!!!

てめえは自分で意識しないうちに、意図的な大罪に手を染めてるんだ。

ならばその罪、俺が清算してくれる、ってな!

「お前の親は愚かにも交通事故なんかで死んだんだったな。まだ幼いお前一人を残して!まったく、そんなの親失格だろ。愚か者もいそこだぜ」

この世界はお前の世界。だったらイレギュラーがその役を請け負わなければならぬ。

俺がお前に、お前の孤独な心に、本当の救済をくれてやるさ。

そのために、今は心を痛めるといい。後でたっぷり、お前の心を俺が癒すんだからな。

さあさあさあ、俺の与える救済のために、今は傷つけ!黒羽刀――

「あゝああ、あゝああ、ああゝあああつ!」

痛い、痛い痛い、痛い痛、痛い、いたいいたいk、いたも痛kいた
い痛いいたいいた痛いイタイイタイイタイ――――

「そうか、初めから手足だけを確実に撃ち抜くようにしてたんだっ
たな」

「……………」

ころして。

ころして。

ころして。

「小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて
命乞いをする心の準備はOK？ ……ククク、もう少し早く聞いてや
ればよかったかな？」

ころして

ころして

「……この距離で外す馬鹿はいない、零距离なら素人でも目標を撃
ち抜ける」

ころし

「これで二人目……今の俺ならいくらでも揉み消せるし、消された
ほうも屑だから問題はないが」

「dust to dust、塵に過ぎなかったものが塵に帰
っただけだ。さあ、後片付けが必要だな」

「なんだ、紙飛行機……？」

『今度は護身のためじゃないから快樂殺人だね。おめでとう、黒羽
刀弥。君もこれで、立派な狂人だ！』

「……あんたは一体何者だ、波木先輩」

殺されるのって直前が一番怖いね。ああ、こわいこわい。
しかし、一番怖いのは死んでも死んでない自分自身かもね。
ふむ……愛し、愛されすぎるのも罪って事かね。こわいこわい。

side out

side Bug

いくら計画通りとはいえ、目の前で大切な者が惨殺されるのは気持ちのいい見せ物じゃない。

死体の頭が踏み砕かれていても、黙ってなくてはならない。それどころか、怒りの感情を覚える事さえしてはならない。

『それでいい、最初の項目はクリアした。次はお前の番だ』
——了解しました。お疲れ様です、普通の人間さん。ノーマル

本当は声なんて聞こえない、彼はそんな能力持っていないし。
ああ、死んじゃったんだなあと、ちよつとしみじみ(?)してしま
う。

「やっぱり、第一段階からオールクリアとはいかなかった。作戦を第二段階に移行しまゝす」

誰に告げるでもなく、つい呟いてしまった。寂しいからかな？

とりあえず、第一段階は彼の立派な死をもって完遂された。次は僕も絡んで、作戦の第二段階が動き出す。

人間、それも普通の人間に出来るのはとりあえずここまで。次は幻想の怪物である僕の出番だ。

「幻想入りの条件、クリア。ファーストステージ第一目標は鈴仙・優曇華院・イナバ……」

彼女ならこのゲームに参加してくれる。いや、参加してもらわなくてはならない。

多少の無理があつたとしても、彼女を引き入れなければ次の花火は上がらない。

能力だけが目当てなら、無理矢理性交して手に入りそうだけど……

「彼の望むままに動くのが……いや、僕が望むまま動く以上それはないね」

片付けを終えた黒羽刀弥が家に帰る。その表情は苦いものだけけど、罪悪感ではなさそう。

その姿を見送ってから約5分、僕も学校から目的の場所へと足を運ぶ。

プレイヤー達は席に着いた。さあ、素敵なゲームを始めよう。

「とーおやくん、あそびましょ♪」

第一部 第二話裏 コンティニューする？ あと〇回（後書き）

こんな感じになりましたー。次回、「バグが行く」次回は面白いといいね！

祐助「最近色々忙しいからってあとがきまで手を抜くのは悪いことだと思うんだ」

ごめん、ホントごめん。でもそろそろスカスカ染みた内容でも更新したほうがいいかなって。

祐助「スカスカ言うな、銃で打たれながら俺視点で状況を冷静に分析するのが不自然だから意図的に省いたと言え」

じゃあそうしとく。にしても、今回は意味不明なところが多いですね。

祐助「まあそりゃ、伏線じゃないの？あとで回収するんだろ」

伏線として回収しないと、ただの暴言になる台詞がいくつかありますね。

たぶんそうなるかと…（書いてるときは案山子様に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

祐助「なのになわざわざ書いた分は、あとでしっかり拾ってくれよ」

そのつもりです。じゃあ明日（正確には今日）はイベント行ってこなきゃいけないので寝ようかな。お気に入りのサークルさんの新作ラミカ楽しみだなあ。

祐助「それならそれでこんな時間まで起きてるべきじゃないんじゃないか」
……」

今日は仕方ないの、本家訪問録の更新も今か今かと待ってたわけだし。

今回はこの辺で、ではまた次回よろしくお願いします。

第一部 第三話 【東方】 蟲の少女が幻想入り【幻想入り】（前書き）

幻想入りの定番が 少女秘技『スキマ落とし』 なのはわかるとして、最初にあの妖怪に遭遇する率が異常に高いのは意味があると思うんです。

関係ないですけどバグさんはアンチ刀弥君がちょっと入ってます。

理由は後日語られる気がするようないような。

彼女にとって主とか家族とか呼ぶべき存在の祐助はアンチどころか刀弥君とラブラブしようとしてるんですけどねえ。あ、BL的な意味じゃないですよ？

第一部 第三話 【東方】 蟲の少女が幻想入り【幻想入り】

side Bug

PM 4:28 ー 幻想郷 どこかの林の中

幻と実体を分ける境界も、常識と非常識を分ける結界も、僕が存在を一切拒むことなく受け入れてくれた。

僕はそもそも別の世界の住人だったから、外で唯一僕のことを認識していた彼が死んだことで僕を実体と認識する要素が0になったのだろうか。

少なくとも、幻想と呼べるレベルの認知度になってしまったのは確かみたいだ。随分とあっさりしたものだった。

「この世界の幻想郷は結界管理が随分甘いみたいだなあ。これなら他世界から来た妖怪の類は誰でも侵入できちゃうよ」
パラレルワールド

別に妖怪に限った話ではないのは僕がいい例だし。

それにしても、僕が彼に聞いた『一般的な幻想郷の結界』はこんなガバガバな筈はないんだけど……やっぱりこの世界の賢者や巫女がしっかりしてないってことかな？

巫女は守銭奴、賢者様は色に惑わされてる。両方共腑抜けだとそんなもんなのかな。

「にしても、今どの辺なんだろう。幻想郷の地図なんて持ってきてないしなあ……っうわあ！」

視界全部が真っ暗になる。突然背後に誰かの気配が現れた。
幼い少女の声で話しかけられる。間違いない、彼女に目をつけられ

た…!

「あなたは和を乱す妖怪?」

『油断大敵』という言葉の意味を身をもって知るのは誰もがいつか通る道。

かといってタイミングの善し悪しというものもある、今は正直まずい部類だ。

「失念していました…聞いたことがあります。賢者も巫女も正常に機能していない幻想入りを簡単に許す幻想郷。そんな世界では決まって『あなた』が守護者を務めているんでしたね」

甘かった、『外の世界で幻想になる』という正規ルートである幻想入りならば彼女の警戒の対象にならないだろうと思っていたところが自分の中に確かにあった。

——それでこの通りとは。全く、どうしたものか。

「あなたの方があの男よりよっぽど守護者ですね、いつも危険な外来人を胃に詰め込んで影も残さない。どんな時もすぐ現れて、危険の芽を摘み取るもの——ルーミアさん」

「そーなのさー」

その言葉と共に闇が晴れる。すぐさま振り返るが、彼女の姿がない。

「ッ!? どこへ…!!?!?」

次の瞬間、羽交い絞めにされた。彼女の腕の力は異常に強く、動くことはできそうにない。

万事休す、には早いんじゃない?

「私はこのままあなたの首を噛み千切れる。でもあなたは抵抗の術がないわ」

「僕はこのまま死を選ぶ。けどそれじゃあ、僕の大事な人が困るんだよね」

ここで殺されては台無しもいいところ、何とか命を繋がなくちゃならない。

死への恐怖は大きくないけど、作戦を失敗して彼の足を引っ張るのは結構恐怖なもの。

「外の世界の女子高生の姿、でも中身は妖怪的存在。あなたはだあれ？」

相変わらず拘束から抜け出せる様子は欠片もない。

声の雰囲気は暖かくて優しいけれど、密着した体から伝わる体温はとても冷たい。

……今は全面的に従うしかなさそうだ。来て早々食い殺されましたでは困るもの。

彼女の目的を考えるに、逆らわなければ殺されはしないはずだし。

「おとなしくするよ、ヴァニシング・バグ。現代日本が生み出した異形の化け物。実年齢はまだ10才にも満たない、極めて危険性の低い女の子です」

「くだらない嘘はやめなさい。己が完成されてない最初の100年200年とはとにかく素直に生きることを心がける、妖怪の基本よ」

嘘らしい嘘を言ったつもりはないんだけど。

拘束が解かれ振り返ると、今度はちゃんとそこに彼女がいた。

「はじめましてルーミアさん。今日から幻想郷こくで生きていくことになりましたのでよろしく願います」

「あなた本当は結構危険そうね、幼少のころから嘘ばかり言っているのは邪悪な妖怪になってしまいわ。改めてルーミアよ。幻想郷へようこそ」

笑顔と共に差し出された手を握り返すと、今度は温かい体温が伝わってきた。

……僕が危険そう？なんでだろう。

side out

side ????

?? ???? — ??? の心の中

さて。いくら元々そのつもりだったとはいえ、『波木祐助』の肉体も随分と早く散ってしまったなあ。

あの体自体は再構築すればいいんだが、手足を吹っ飛ばされるのがどれだけ辛いのか良くわかったよ。あの時の鈴仙を思うと可哀想でならない。

まして彼女はその上で、主人の役に立つはずが足を引っ張るという屈辱的な状況にまで陥ったしな。全くなんと言えは……

『一応順調に進んでる、と見ていいのかい?』

「屠ほふりし者もの」か? こっちはこっちでなんとかやってけそうだ。そっちはそっちの使命を全うすればいい。

『当然。僕も僕の世界の××ぐらい……大切な女の子一人ぐらいは守って見せるさ』

ああ、応援してる。俺も愛する者達のため、頑張らなきゃ……

『俺、これからどう動いていくつもりだ？俺』

傍観者、個体にして全体の存在……「名無し」か。

俺の動きを見ていてくれるのは嬉しいが、場合によってはお前の期待する結果が出せないかもしれない。

まあ精一杯努力はさせてもらうけどな。もう物語りは動き出している、今更止まったり放棄するつもりもない。

『俺はいつもお前を見ているぞ、俺 ……たとえ結果を出せなくても、せめて戦いぬけよ、俺』

ふん、黒羽刀弥やその周りの者達に素敵なプレゼントを……ああ、やり通すさ。

『そうかい、だったらそれは早くして欲しいもんだな。俺としては』

……刀弥か。全く、今日は俺のプライベートエリアにズカズカ入ってくる奴が随分と多いな。

何か特別な事情でもあるのか？

『お前の事の進め方に問題があると感じたから、「屠^{ほふり}」も「名無し」も様子を見に来たんじゃないのか?』

それはお前だろう。進行速度に関しては慎重にやりたい気持ちがあるからこそだ、了承してくれ。

それに、あいつら二人と違ってお前は直接力を借りることになるかもしれないんだ。そっちはそっちで準備でもしといてくれ。

『ラジャ。最後に最高の花火を揚げてロマンティックにめてやろっぜ』

雰囲気作りは得意だぜ、悪い雰囲気と微妙な雰囲気専門だが。

やっと全員行ったか、まあこのタイミングで絡んできた理由もわからんでもないな。

まだ俺が肉体に宿らずに、精神のみの今の状態のほうが接触しやすいからだろう。

でもそろそろ肉体に戻らんと、再構築は終了したようだ。

「でも、あの世界に戻る前に私達の世界に寄っていくんでしょう?」

紫様。あなたにわざわざ出向いてもらえるとは光栄です。

そちらの世界は、相変わらず平和にやっていますか?

「自分の目で見なさいな。ついでよ、体も心も私が連れてってあげるわ」

元々俺が遅いから急かしてやろうと迎えに来たのでしょうか?……恩

に着ます。

それじゃあ最初に紅魔館へお願いします。あそこの住人達から最初に交渉したいので。

「いいわ。何度か殺されそうになるだろうから、交渉して回るときは藍も同行させましょう」

幻想郷中回ることになりますしね…ありがとうございます。

本当に、私のような人間一人に手を尽くしていただいて…：…なんとお礼を申し上げればよいのやら。

「勘違いしないで欲しいわね、私は人間のあなたではなく貴方と共にある『JOKER』に協力したいの。JOKERは全てを受け入れる、もう一つの幻想郷みたいなものだもの」

ですがJOKERの事は俺自身のことでもあります。アレと俺は今や一体となった存在ですから。

「それでも、あなたは単体で見ればただの変人よ。あなたにこの私を惹きつけるものがあると思っ…？」

わかりました、この辺でいいでしょう。それでは『黒羽刀弥と愉快な人形達』のために、一働きしましょう。

s i d e o u t

あのあと僕はすぐに彼女に連行され、事情聴取(?)を受けていた。

『どこから来たのか』『目的は何か』『仲間はあるのか』などなど

……

部屋の真ん中の丸いテーブルに椅子に座って向かい合って、あれやこれやと色々聞かれた。

彼女は随分となれた様子で、会話の最中にもなかなか隙を見せないことから何度もこうして新たな住人の「選別」を行ってきた事が窺い知れた。

現時点では抵抗も誤魔化しも効果がなさそうなので、知ってる範囲のことは可能な限り素直に答えた。

「それにしても以外でした。あなたに自分の家があったなんて」

必要最低限の質問は一通り終えた気がしたので、タイミングを見て気になったことを聞いてみた。

闇の妖怪ルーミアと言えば、てっきり野宿上等サバイバル万歳な野良妖怪かと。

「余計な口を挟まない。雑談はこれからいくらでも時間ができるし、あなたからの質問も後で聞くわ」

……まだ聞き足りないことがあったろうか、そろそろじっと座ってるのも辛いだけだ。

基本的にっこり笑いながら話してくれているから悪い気にはなかなかならないからいいのかな？

ルーミアさんは僕と話しながら色々メモした紙を見つめなおし、さらに何本かの線を書き足してから顔を上げた。

「確認しましょう、あなたの名前はヴァニーちゃん。外の世界で最近生まれただけの蟲の妖怪さん」

「大体そうです」

ヴァニーちゃんて、誰。いや、僕だけだ。

名付けた本人は特に気にせず、そのまま言葉を続けた。

「幻想郷こっちのことは外である程度調べ済みで、スペルカードルールの要領も把握している」

「実戦はまだですけど」

簡単に言えば撃って避けるだけだし。美しさやかすり稼ぎは慣れてからでないと気にする余裕がなさそうだけど。

「一人しかいなかった人間のお友達が死んでしまったから、仲間を求めてやってきた無害な妖怪」

「そうなります」

嘘は言っていない。嘘は言っていることにならないよ。

変な誤魔化したところでルーミアさんに隠し通せる気もしないし。一通り確認したルーミアさんは、額に手を当てて少し考えこんで――まあいいか。と呟いてまたこっちに向き直った。

「まだ何か抱えてそうな気がするけど、とりあえずはあなたを敵ではないと判断してあげるわ」

「ありがとうございます」

会って数時間しか経ってない僕の印象だけれど、ルーミアさんはずっと笑顔だ。

100%ではないかもしれないけど認めてもらえたようだし、自然と僕の顔もほころんだ。

彼女は席を立ち、僕の座る椅子の後ろまで歩いてきて、僕の頭を撫でた。

「ごめんなさいね。これからしばらく面倒見てあげたいんだけど、私は幻想郷中を警邏する使命があるからずっとあなたの傍にはいてあげられないの」

彼女はすごく申し訳なさそうな声で言った。

僕は頭を優しく優しく撫でられて、いい気分だった。

だけど、僕の中には元々彼女にお世話になろうというつもりはない。

「いいです、あまりお気遣いなく。一応一人でやっていける程度の、力も頭脳もありますから」

立ち上がって振り返り、彼女の目を見てそういった。

だけど彼女は首を横に振り、自分の右手の人差し指を僕の唇のところにまで持ってきた。

「一から全部一人でなんて大変すぎるわ。ここを使わせてあげることも考えたけど、私は基本ここにいないし、一人になって寂しいでしょ？ 私の友達に紹介してあげる」

そうやって彼女はウィンクした。その姿はとっても可愛くて、ちょっぴり妬ましい。

彼女の魅力に心を奪われていると、手を引かれて外に出ていた。
外はもう真っ暗で、空には星や月が輝いていた。

「とりあえず、私があなただの最初のお友達になってあげる。あなた、今はひとりぼっちなんでしょう？」

——ひとりぼっち。一時的なことだから、と自分に言い聞かせて誤魔化していたけれど……改めて言われるとやっぱり少し寂しいかな。つい、引かれて来た時に繋いだままの手に力がこもった。

彼女もその手を優しく握り返し、もう片方の手を私の背に回した。

「大丈夫よ、今は私がいるから。それに私の友達や、他の妖怪達もあなたを拒む事はないと思うわ」

「……ありがとう」

なんで彼女は会って間もない僕にこんなに優しくできるのだろう。あの時早々に始末することもできた、僕をこんなにも。

同情されたのかな？それとも他に何かあったかな？僕誰かと関わった経験あんまりないしなあ、他人の考えなんてわからないよ。

「悲しんでる誰かに優しくするのはどこの世界でも常識よ。私は私にできることを、精一杯するだけ」

彼女の体が夜空に舞う。星達の輝きを受けた金色の髪はより一層の輝きを放っていた。

「弾幕ごっこ、これから必要になるでしょ？相手してあげるわ」

「…うん、お願いします。ルーミア、さん」

彼女と同じ高さまで飛び上がり、構える。

このまま目的を忘れて、彼女のいるこの世界に幸せを探すのも面白いかもしれない。

そもそも彼だって、私に事を強制するつもりはないと言ってたし……

「あなたの少し前にね、やたらと強い人間がやって来たの。彼のご機嫌を損ねた妖怪は片っ端から痛い目にあってるわ」

僕に会ってからずっと暖かかった彼女の表情が、初めて曇った気がした。

——やっぱり、今更アイツと無縁では終われないか。

「自分の力に酔ってて、暴力的で、女の子の気持ちも考えないで何人もの心を弄んでるサイテーな男……」

「あら？そんな最近のことまで知ってるんだ。だからさ、少しは自衛できるようにもなっておかないとね」

自衛のための弾幕……か。本来は美しさを競ったりする少女の遊びであつたものが、単なる戦闘手段に成り下がろうとしている現状。

もちろん、アイツがもたらした影響が小さくないはずだ。

どこまでやれば気が済むのだろう、黒羽刀弥は。

「夜の弾幕は、昼間よりいっとう綺麗なんだから。さあ、ダメになるまでついておいで！」

再び素敵な笑顔をこちらに向けて、彼女の弾幕^{アート}が夜空に舞った。

何もせずにはいられない、生活に慣れたらすぐにでも動き出そう。

こんなに素敵な、笑顔を守るためにも。

ピ
チ
ュ
ー
ン

第一部 第三話 【東方】 蟲の少女が幻想入り【幻想入り】（後書き）

ではとりあえず三つほど。

1つ、ルーミアさんは紅魔郷＋αのイメージで書いてみました。本家訪問録との性格の違いなどは後でフォロー入れます。

2つ、???（＝祐助）の場面は紫様と刀弥君とのやり取り以外身内ネタなのでわからなくても問題ないです。簡単に言えば脳内俺会議みたいなものかと。

3つ、あの紫様は訪問録の紫様とは別人です。あとツンデレでもありません。べ、別にあなたのために協力するわけじゃないんだから！！
／／／／／

てな感じでして3話でした。今回はやつとこさ裏無しで終われそうです、初挑戦だった一人称にも少しは慣れたかなあ。

bug「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

いや、それ違う。そういうのじゃないから。

bug「お前に明日は来ない（キリッ）」

それも違う。あの子の合体（？）してるJOKERは○○○○と××の二つの意味を持ったJOKERなの。

なんというか、でっかすぎて一言で表現できないけど。これでやつとチート能力者の仲間入り！…できるのかなあ、微妙。

bug「そーなのかー」

そーなのさー。ところで、その後のシーンのルーミア自宅〜ピチュ
ーンまでは二回ほど丸々没で書き直しました。

bug「自宅に連れ込まれてあんなことやそんなことを聞かれると
こまでは全ルート共通だったけどね」

はい。Rー15とRー18と全年齢かで悩みました…とかではなく、
ルーミアさんの性格をどれにするかで悩みました。
結果、選んだのは一番健全なルートでした。

bug「全部健全でしように」

バグさんの容姿は黒くて肩にかかるかからない程度の髪の僕っ娘
女子高生ならご自由に想像ください。

下手なりに絵を描いてみようかと思いましたが、その前に完結する
可能性が高いので。

bug「更新速度が上がると思っているのか、絵が絶望的と思えば
いいのか……」

ご想像にお任せします。おっと、この話題が最後になるとは…

皆さん、「幻想入りモノ」でルーミアさんに最初に遭遇する確立が
異常に高いのは彼女が危険そうな外来人に目を光らせているから、
という設定どうでしょう？

今回は明らかに生かしきれてませんでした、設定自体は結構面白
いんじゃないかな？と思っていたり。

自分は見たことありませんが、既出でしたかね？

bug「ルーミアさんを書く予定すらなかったのに、僕の幻想入り
シーンで勝手に手が動いて書き上げてたんだって」

毎回毎回、えっちな目的で幻想入りしてきて「げへへへ：まりさたくん」とか言ってる中年男とか、危険性の高い外来人は彼女が処理しています。

bug「というオリ設定乙」

よくある幻想入りモノで力ある者が幻想入りしてきたとき、実際に言葉を交わしたりして危険性を量っているのです。

いつも負けている？危険じゃないから負けてあげたんですよ。本当に危険な相手は全部パッコンしますよ。たぶん。はあ、ルーミアさんぽっくんしたい……

bug「子供はできないと思いますが」

えっちな意味じゃないです。無論、グロイ意味でも……いや、そっちはありかなあ。

bug「相変わらず変態ですね、全国〇万人のルーミアファンに殺されますよ」

冗談です。少女のお肉とかおいしそうとか思うわけないじゃないですか。カニバリズムですか。

あと、変態は褒め言b：ゲフンゲフン、この辺で終わりました。よろしければまた次回もよろしくお願いします。

bug「質問、ダメだし、批判、感想、ラブレターは全て感想までお願いします。読んでくださり、ありがとうございました」

第二部 第一話 昆虫の妖怪の出会いと紅魔館への秘密の交渉（前書き）

前回で話にある程度区切りがついたので、そろそろ第二部『開幕、舞台は幻想郷へ』編に移行してみます。

今更ですが、一部あたり4〜5話程度にするつもりで書くのなら部という表現より章のほうがふさわしかったような気がしています。どうしてもいいことですが、今回のサブタイは本家一話から。二人とも幻想入りしてからの一話目ということ。

第二部 第一話 昆虫の妖怪の出会いと紅魔館への秘密の交渉

side ??? (Yasuro)

AM 0000 ー 幻想郷、紅魔館門前

悪魔の住む館、紅魔館。

第二次月面戦争の時も最も積極的に動いていた、悪魔達の住む館。あの方達の事、おそらく事情を話せば真っ先に協力を約束してくれると判断して最初に訪れた。

「お待ちしておりますわたなべのやすろ、渡辺康呂様。話は八雲紫から聞いております、どうぞお通りください」

「ご丁寧にありがとうございます、美鈴さん」

美しい門番の営業スマイルについていよいよにやけながら、開いた門を一人くぐった。

藍様は仕事が一区切りするまで来れないとの事で、大事な話をしに行くことだけを予め紫様に伝えておいてもらった。

自分がしようとしていることに協力してもらうのだ、交渉自体は自分であるのが筋というものだろう。

門を抜けたすぐ後に、瀟洒な従者が現れた。

何もないところに急にパツと現れるのは、相変わらず心臓に悪い。まして現れるのが素敵な笑顔の美少女とあっては、『自分はどう天に召されたのか』とおかしな錯覚を起こすのも無理はないだろう。

無理か。

と言っても、これまた営業スマイルなのが悲しいが。

「お久しぶりです、康呂様。愛想笑い程度でそんなに喜んでいただけるのなら、いくらでも」

「明らかにそれだとわかっていても、本人の口からは聞きたくなかったですね」

愛想笑いですか。『かわいいは正義』と言うけど、それが小悪魔的なものだった場合も正義と言うのだろうか。悪魔が正義とはこれいかに。

ちょうどここには本物の小悪魔さんもいる事だし、帰り際にちょっと寄り道して聞いてくるのも悪くないかもしれない。

とりあえず、かわいい事はいいいことではあるのは確かだ。

「それでは、客間までご案内しますわ」

彼女のあとに続き、外も中も真っ紅な館の中へ足を踏み入れる。

中に入れば上下左右前後全てが紅メインの配色で、少し眩暈を起しそうになる。

なるほど、そんな状況下なら尚のこと前を歩く彼女に目が行く。青と白のメイド服が目優しい。

前来た時はこんな落ち着いて内装を見る暇もなかったからなあと思うと、何か感慨深いような気がする。

そんなことを思いながらボーっと歩いてると、目的の場所についていた。

咲夜さんに言われるままに来客用のソファに座り、毒物入りではない普通の紅茶をいただいた。

「今お嬢様を呼んで来ますので少々お待ちを」

「あ、お願いします」

彼女はまたもタネ無し手品を使い、パツと俺の前から消えた。便利なものだ。

一方の俺は、目の前に置かれているクッキーと紅茶で時間を潰す。毒物が入っていない点では普通と言えるが、実はお砂糖たっぷりの甘く紅茶をちびちびと飲みつつ、高まる緊張を抑えようと努める。なにせ、女王が一番活発な時間に足を運んでしまったものだから。

心身ともに元気な時に話した方がちゃんと聞いてもらえらると思つたとはいえ、単純な力の話で言えば昼間に訪れたほうが賢明。

少しでも機嫌を損ねるようなことがあれば、最近体験したばかりの死の苦しみをまた味わうことになる。

吸血鬼の力とその恐怖は、かつて対峙した時に散々味わつた。弄ばれて死ぬ苦しみも最近味わつたばかり。どちらもできればもう二度と……

「お待ちせしました康呂様。今お嬢様がこちらに來ますわ」

突然現れるのは本当にやめて欲しい、クッキーをかじつてその甘さに緩んだ顔をしている時に声をかけられる方の身にもなってくれ。詰まらせた喉に紅茶を流し込み、涼しい顔で横に立っている彼女を睨んだ。

……かといって、かわいい女の子がいたずらに成功した満足そうな顔をしていたら、怒るに怒れない。

気付けば緊張感もいくらか解消されていた。全くこの人ときたら、天然なのかそうでないのか。

『紅き月の妖光が、私の渴きを癒す晩に———こんなにつまらない來客なんて、興醒めもいいとこね』

不意に背後から、エコーの効いた声が響いた。

部屋中の灯りが全て消え、俺の頭上をうっすらと赤く発光する蝙蝠の群れが通り過ぎた。

テーブルを挟んで反対側の椅子の上に蝙蝠達が集合して人の形をつくり、その姿は次第に見知った者の姿へと変わる。

：相変わらずこういう遊びが好きだなあ。やってる方は戯れのもりかもしれないが、迫力が伴ってるものだから、見せ付けられる方はかなり圧倒される。

「また会えて光栄です。誰より高貴な、夜を統べる御方」

「顔を上げなさい。そんな事、あなたに言われなくても自覚済みよ」

言われた通りに顔を上げ、妖しき魅力に包まれたその姿を視界に入れた。

相変わらず部屋の灯りは消えたままだが、彼女の身体はぼうつと、紅い光を放っている。

永遠に紅い幼き月、レミリア・スカーレット。画面越しに出会う分には「コスプレ幼女」とでも何とでも言えるが、本物の威圧感は見ただ目がどうこうというレベルではない。

「さ、あなたの持ってきたと言う話を聞いてあげるわ。せいぜい楽しませてみなさい」

一挙手一投足が自分を殺す動作と錯覚しそうになるプレッシャーの中、俺は交渉を開始する事となった。

……藍様、まだ来てくれないんですか？

side out

side Bug

幻想入りから約二週間

AM 11:24 — 幻想郷、迷いの竹林

幻想郷に着いてからまだ二週間かそこらだと言うのに、暮らしにはもう大分慣れてしまった。

ここでのルールは、酒と弾幕に強い奴が正義というわかりやすい世界。実にシンプル。シンプルこそベスト。

もちろんそれだけで片付くほどの単純な社会ではないけど、僕がここに来たのは年末年始の宴会ラッシュのタイミング。

どうしてもそんな印象を受けてしまうほど、今の幻想郷は酒と弾幕^{けんか}の世界なのだ。

『見ない顔だねえ、いっちゃ揉んでやろう』

『妖怪？とりあえず退治してあげるわ』

『さあさあ！飲んで飲んで！宴はまだまだ始まったばかりですから！』

犬も歩けばなんとやら、僕は歩けば宴会にぶち当たる。

あっちでもこっちでも、酔っ払いどもに絡まれて、弾幕か飲み比べを仕掛けられる。

最初の方こそ「新参者への洗礼かな」と付き合っていたけれど、8回目の宴会以降はできるだけ参加しないように逃げ回っている。いろんな意味で、体がもたない。

「未成年に飲酒をすすめるなんて、感心しない世界ですねえ」

「人とそうでない者が対等に話すためにはね、お酒の力を借りるか、ぶつかり合うかしかないのよ」

そうは言っても実年齢は一桁、外見的肉体年齢もJKの僕には辛い期間に来たものだと思う。

その分、周りとの交流は深まったと言えるのかもしれないけど。

「よく、わかりません。子供ですから」

「注射を怖がらない子供なんて、あなたが初めてね」

今こうして、鈴仙さんとお話しているのもその成果の一つだ。

宴会の席で（半ば無理矢理に）知り合い、なんとか連絡を取ってお暇がある時に会うこともう2回目。場所は両方ともこの竹林で、その理由は2つ。

一つは彼女が空いた時間に来やすい場所であるから、もう一つはこの場所なら周囲に話を聞かれにくいから。

狙って竹林内の特定の場所に来れるのはこの竹林について熟知している者だけ。その数は数えるほどしか居ない。

よって、誰かが僕達の会話を盗み聞きする可能性も高くはないと判断したためだ。

「それより聞いて欲しいんだけど、昨日もまたてゐがね——」

「あー、またてゐさんですか」

まだ友人関係を築こうとしている段階だけど、彼女は愚痴を聞いてくれる相手がいるだけで結構満足しているみたい。

それにイタズラの話は、僕もすでに被害者となっているので共感できる面もあった。

その後彼女と『被害にあった者の気持ち』や『今後どういった対応策をとるべきか』、『でもやっぱりてゐさんは可愛いところありま

すよね』なんて話題に花を咲かせ、あっという間に数刻程が経った。

「ありがとうね、バグちゃん。どうでもいい話に付き合ってくれて」
「いえ、僕の方こそ色々話してもらえて楽しかったです」

鈴仙・優曇華院・イナバという女性はまだ暇を持て余すタイプではない。別れの挨拶をして、今日はもう背中を見送ることにした。去り際の顔が清々しそうだったので、少しか役に立てたかと思うと嬉しかった。

目的のため近づいたとはいえ、本当に仲良くなって悪いということはない。

幻想郷に来て、ルーミアさんに会って、空気に流されるまま宴会に巻き込まれて。

そして、彼女と話すことができた。ルーミアさんに続く、僕の二人目の友達……だったらいいな。

「……それはさておき、どうやってこの竹林から出たものかな」

ここに住む者達以外は、とある焼き鳥屋さんくらいしか迷わずには出られない迷いの竹林。このままだと日付が変わる前に抜け出せるかも怪しい。

前回は道に迷っているときに落とし穴に引っかかって、てるさんに抗議したところ案内してもらった事ができた。でも今回は……

「仕方ない、とりあえず歩きながら考えるかな」

なんでこんな無計画なことになったのかなあ、と考えた。

その時、自分は他の何よりもあの兎さんの顔を見るのが楽しみで飛び出してきたことに気付いた。

友達……友達か。いいものだね。彼が黒羽刀弥を狙っている気持ちが

少しわかったかもしれない。

彼の狙いはアレを行うこと、その手段として友達になりたい。それはつまり……

「読みがあたっていれば、だけど。そうか、そうだったのか……」

なんとなく呟いて歩き出した。道はよくわからないから、鈴仙さんが帰っていったのとは反対の方向に向かって。

side out

side Reisen

兎の耳は大きな耳。とつてもとつても大きな耳。

どうしてこんなに大きいのか？と聞くと、心の声を聞くためだよ。と言った。

どうして心の声を聞くのか？と聞くと、そうすればやさしくできるから。と言った。

どうしてやさしくするの？と聞くと、やさしくできたらあったかなれるから。と言った。

初めて彼女と会ったとき、微かに悲しみの声が聞こえた気がした。

私の耳は大きいけれど、誰かの心の声まで聞くことはできない。

それでもあの時は聞こえた気がした、彼と会ったときと同じよう。

本当に微かな、小さな小さな泣き声。

「最近の外の世界はそんなに悲しいことばかりなのかしら。吸血鬼

のところのアイツやあの子を見てると……」

別れたばかりの彼女を思い、なんとなく出た言葉。

その言葉は誰にも届かず、目の前にある土の壁に吸い込まれていた。

新年に入ってから落とし穴に引っかかったのは、今回で3度目だった。

s i d e
o u t

第二部 第一話 昆虫の妖怪の出会いと紅魔館への秘密の交渉（後書き）

バグパートをどんな話にするかで数日悩みました。（今回の遅れた理由の大部分）

鈴仙さんパートを書くとき、てゐさんの呼び方がてゐでいいかどうか確認するため、花の対戦モードで鈴仙×てゐで対戦。

勝ち台詞を見るために2時間近くかかりました。（結局『何処行つてたのよ』ぐらいしか喋ってくれなくて、泣く泣く三月精で確認しました。STORY MODEまでやる気力なんて、もう削られた後でしたし…）

そんなこんなで遅れたわりにはに長さは相変わらずな今回。たぶん前回に引き続きオリ解釈てんこ盛りです。
いやあ、どうしよう。

bug「いい感じにリミッターが壊れてきましたね」

それをいいと言うのか、悪いと言うのか……

それはともかく、今回は祐助さんがあっちの幻想郷の紅魔館と接触。

bug「次回、逆切れされて死亡。南無〜」

死にません。たぶん死にません。おそらくは…死なないと思います。
……死なないよね？

bug「大丈夫、万が一死んだって今は康呂として死ぬから。祐助の死にはカウントされないよ？」

そういうのはいらない。大体、君ら二人は私の自己投影キャラなん

だから。そう簡単に死なれたら心が痛い。

bug「初耳かも。そうだったの？」

一話表かそこらで祐助には言ったような気がする。二人とも私の意志や性格をそれぞれちよつとずつ受け継いでいるのよ。

bug「つまり二人が融合すれば…！」

その展開はない。断じてない。二人が融合して私が本編に出てくる展開は絶対無い。

そもそもちよつとずつしか分け与えてないし、あなたは私の分身じゃなくてあなた自身。あなたは『ヴァニシング・バグ』でしょ？

bug「……………さもない一人芝居はやめろ、見てるほうが悲しくなる」

はいはい、そうですね。演じてる私自身がおそらく一番悲しいです。話の内容についてに戻りましょうか。今回で祐助の別の名前『渡辺康呂』が登場しました。

地味に「わたなべ」ではなく「わたなべの」になっています。特に意味は無いけど（

祐助の名前が一話裏で出てきた時の通り、彼はそれぞれの世界を訪れるたびにその世界での自分の名前を手に入れます。

『康呂』の名はかつて彼があの世界を訪れたときに手に入れたもので、向こうの知り合いにはその名前です通っています。

会話から察せるように、紅魔館組とはかつて一戦交えた仲であって、決して友好的といえるものではありませんでした。

そんな彼女らにわざわざ持ちかける交渉、それと彼の狙いは……？

b u g「どうせ黒羽刀弥とキャツキャウフフするだけでしょ？」

広い意味で言えばそうなるかもしれませんが、友達になってやる宣言もしてましたし。

そこから先にはどんな考えがあるのやら……
それより、バグさんの方にも動きがありましたねえ。

b u g「時系列的に『女と妬みと――』の直後くらいですから。ちようどその時期にぶつかってしまった訳です」

お酒飲んだ明確な描写はないし、○歳といっても人間じゃないから法律的にセーフのはずですよ。

……昆虫だし。

b u g「まだロクに昆虫らしさをアピールしてませんけどね」

アピールする機会が無いから仕方ない。作ってあげない私が悪いとも言うけど。

バグさんパートはどうやって幻想郷勢に絡めるか悩みましたが、初心に帰って訪問録を読み返したらその時期にドンピシャだったので宴会に。

お酒の力は偉大ですねえ。鈴仙さんとも急接近できました。（やっぱり歴史の浅いオリキャラよりも原作キャラを書いてる方が楽しいことは黙っておくか……）

b u g「さて、上をご覧ください」

……あれえ？なんでこんなに後書きが長いのか？（汗）

b u g「それはねえ、その口がどうでもいいことばかりベラベラ喋

るからだよう（こんな駄文より本編書けやコラ、僕の次の出番はまだかつ！）わかった？」

了…解…。では無理矢理まとめましょう、今回はこの辺で。お相手は私作者と

bug「みんなの僕っ娘アイドルバグちゃんでした。また来週」
に新作が来るかどうか…」

誤字脱字報告、質問、感想などもお待ちしております。お付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1029o/>

『幻想郷訪問録』訪問録。

2011年2月9日16時36分発行